

伊丹公論

刊号
復第1号
通巻20号

発行所 伊丹市立図書館ことば蔵
伊丹市宮ノ前3・7・4
TEL 072・784・8170
編集 伊丹公論編集委員会

幻の郷土紙 73年ぶり復刊果たす

今から101年前、伊丹に図書館を作った小林杖吉（丹城）は、「郷土研究伊丹公論」（のち「郷土研究伊丹」）を昭和初期に発刊した。丹城の郷土への愛着は、時を超えてことば蔵を誕生させ、公論復刊という新たな土壌に引き継がれた。そのあらましをひもといてみよう。

祝 復刊

今から七十七年前、昭和の初期に発行されていた郷土研究伊丹公論がこのたび復刊されましたこと心よりお祝い申し上げます。先人が、伊丹の文化向上をめざして作られていた新聞が、図書館「ことば蔵」の一周年を記念して復刊されたことに、ことば文化都市伊丹の心意気を感じております。これからも多くの市民の方々に愛される新聞を、末永く発行されることを期待しております。（談）

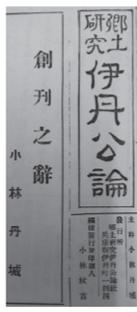
平成二十五年夏

ことば蔵 名誉館長

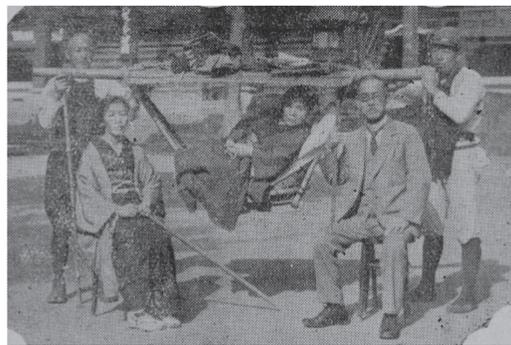
田辺聖子



「郷土研究伊丹公論」創刊号より



右から二人目（椅子に腰かけている）が小林杖吉氏。（郷土研究伊丹第17号より）



「伊丹公論」復刊に寄せて

伊丹市長 藤原保幸



「伊丹公論」が復刊されることとなり、私はとても嬉しく思います。伊丹市立図書館「ことば蔵」が開館するちょうど百年前、宮ノ前に私設図書館を設立された小林杖吉さんという篤志家がいらっしやいました。この方が発行された郷土研究の新聞が「伊丹公論」でした。この新聞が時を超えて、今回「ことば蔵」により復刊され、再び伊丹の情報を発信し始めることに感慨深いものを感じます。「伊丹公論」が、多くの方々へ愛読され、伊丹についての興味・関心をもっていただける情報ツールに発展していくことを期待しています。

「伊丹公論」は、昭和11年1月20日（77年前）創刊された。編集発行兼印刷人は小林杖吉で、主幹は小林丹城、一面トップの格調高い名文の決意「創刊の辞」も小林丹城となっている。

筆名、小林丹城。本名、小林杖吉。氏の名前を聞かれたことがあるだろうか。実はこの人、伊丹にとって、宮ノ前にとって、そして図書館「ことば蔵」にとって関わりが深い人物なのである。では、いったいどんな人だったのか。功績をふり返ってみよう。

明治4年に鳥取市で生まれ、家業は酒造業だった。偶然だが、ここから伊丹とつながりがあったのだろうか。そして、早稲田大学を卒業して後に大阪医学校（現大阪大学医学部）で教授となる。しばらくして、同校を退職して出版社で字典類や教科書などの著述編集にたずさわった。著述業のかたわら伊丹市宮ノ前通りに「三余学寮」なる私塾を開いて、町内の師弟に英語・数学・地理・歴史・簿記などを教えた。

この人の妻は、まず私塾の月謝で書籍類を購入し、明治45年（ことば蔵ができる100年前）に塾と併設して私立図書館を設立したのだ。当時、兵庫県全体で図書館は15館で、阪神間でも伊丹のほかは神戸市立図書館が存在するだけだった。その図書館の蔵書とし

て図書の間覧・貸し出しを無料奉仕で行った。宮ノ前の大恩人だ。大正3年には巡回文庫を開始、蔵書は和漢書、洋書など4万冊にのぼり、昭和18年に図書館を閉館して蔵書は伊丹市に寄贈した。伊丹の大恩人だ。

「伊丹公論」は、昭和15年11月の第19号（73年前）まで発刊された。以後、小林氏は悠々自適に郷土史研究に専念され、昭和32年3月4日、85歳の天寿を全うした。ことば蔵では、昨年の三余学寮復活に続いて、ここに伊丹公論を復刊させ、小林丹城氏の功績を讃えたい。

伊丹公論とは

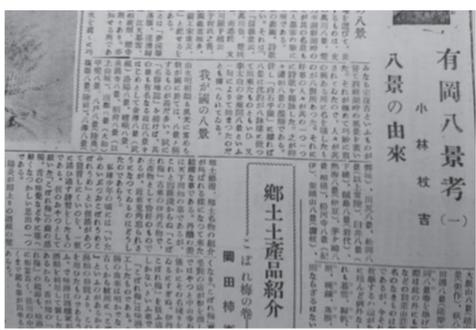


小林杖吉氏が発行していた「郷土研究伊丹公論」は毎号タブロイド版4ページであった。内容は厚く、濃かった。小林氏自身も熱心な郷土研究者であり、新聞も「郷土研究」の名にふさわしく、小林氏以外も著名な方が寄稿されていた。

「郷土研究伊丹公論」は伊丹に関する歴史研究とともに、「伊丹酒」「有岡八景考」「郷土土産品紹介」など文化的な記事も多い。また、小林氏が個人で発行されていたので有料の新聞で、硬派な内容である。その中に「酔後録」のような柔らかいコーナーも見受けられ、若干の遊び心も感じられる。今回復刊させる「伊丹公論」は第19号までと同じくタブロイド版4ページで構成し、硬派な記事とともに現代風に伊丹市立図書館「ことば蔵」の情報、伊丹市内の情報、4コマ漫画など柔らかい記事も織り交ぜて発行していきたい。

「郷土研究伊丹公論」は伊丹に関する歴史研究とともに、「伊丹酒」「有岡八景考」「郷土土産品紹介」など文化的な記事も多い。また、小林氏が個人で発行されていたので有料の新聞で、硬派な内容である。その中に「酔後録」のような柔らかいコーナーも見受けられ、若干の遊び心も感じられる。今回復刊させる「伊丹公論」は第19号までと同じくタブロイド版4ページで構成し、硬派な記事とともに現代風に伊丹市立図書館「ことば蔵」の情報、伊丹市内の情報、4コマ漫画など柔らかい記事も織り交ぜて発行していきたい。

復刊号にも掲載しているが、「郷土土産品紹介」「現代人物風景」「伊丹八景」「伊丹俳壇」「酔後録」なども復活させていく。（綾野昌幸）



老舗探訪… ～みどり園～



「郷土研究 伊丹公論」での「みどり園」の広告… (写真説明)

伊丹公論の片隅に茶という字と共に写真広告が載っていた。「みどり園」。

言わずと知れた伊丹の老舗茶舗である。

阪急伊丹駅近くにある本店は昔は茶を貯蔵する蔵だった。創業は明治35年、大正元年頃、宮の前で開業し、今の本店に移ったのは35年前。

店主佐野さんは伊丹のお茶の歴史を大事にしている。

伊丹の茶の歴史は古く、かつて有岡城を治めた荒木村重は「利休七哲」と呼ばれ、江

園茶商を知る茶商小林杖吉氏、静かな手あてで、店の火鉢に飲んでもいい。お茶を飲むのも、店にある「茶」の看板は寺院高僧の筆によるもので、頂いたものとか。

戸時代初期から中期にかけて酒文化と同じく伊丹の茶の湯文化も花開いた。

その後、近衛家が領地替えて来た。

お茶が武士の嗜から商人の文化、町衆の文化へと推移したのもこの頃だ。

「お茶を通して文化を伝える事、それがお茶の事しかできない私の使命だと思っていま

みどり園はオリジナリティにこだわり、産地に向き、生産者から直接購入し乾燥させる

「お茶を通して文化を伝える事、それがお茶の事しかできない私の使命だと思っていま

息子さんには宇治で抹茶の修業中、娘さんは祖母と本店で共に茶道教室を開いている。

伊丹のお茶の文化が途切れる事なく継承されていくのを頼もしく思いながら、出して頂いたお抹茶「有岡の翠」を

ずすと吸った。(村上有紀子)

所まで自分達で行うという。本店以外にも阪急駅ビル1階に店舗があり、併設された喫茶室では目の前で美味しいお茶を点ててくれる。

そこで佐野さん夫婦からお茶の話をつくり聞かせるのがいい。

現代人物 風景

西田 宏和
(西田写真館館主)



西田宏和さんは、18歳の頃から写真の勉強をはじめ、平成2年から宮ノ前で西田写真館を営んでいる。きっかけは「生活のため」というものの、画家であったお父さん譲りのこだわりと確かな技術、対話を大事にする姿勢で顧客からの信頼は厚い。商売を始めた頃はこだわり過ぎて採算を度外視することもあった。当時を振り返って「自分が納得いく仕事しかしない人だから。やればやるほど赤字や」と奥さんは笑う。

そんな西田さんは、毎年10月におこなわれる宮前ふとん太鼓巡行を復活させた立役者でもある。小さい頃の思い出である祭りが、いつ頃からかおこなわれなくなっていた。

「にぎやかさを取り戻したい」「人を集めよう」とまちの活性化に関わるなかで、ふとん太鼓に想いを寄せた。「絶対無理だ」と言われたが、市内外の友人達に声をかけた結果約80人が集まり平成10年に第1回を成功させた。「本気でやろうと思ったら必ず協力

者が出てくる」と語る。以来一度もふとん太鼓を落とすことなく、今日では130人の担ぎ手が集まる(8割以上が伊丹市民)。多くの若者が参加し、祭りの代表は息子の慶介さんに代わった。「若い人がその気になって、伊丹が良くなっていくのはいいこと。今は年長者として見守るのが役目」と言いながら、「まだこの辺りでは新参者やから、もうちょっと何かしたいなあ」と笑う。なんとも頼もしい存在である。(永井純一)

郷土土産品紹介 ～酒の露の巻～



そんな中満の新しいお菓子に期待しながらも伝統の銘菓も大いに楽しみたい。(齊藤芳弘)

伊丹には様々な名産、名品、銘菓があるが、そのうちのひとつとして、中満の酒まんじゅう「酒の露」がある。日本酒の芳醇な香りがする皮で十勝産の漉し餡を包んだシンプルなまんじゅう。何個でも食べられそうな手頃なサイズという点もあり、老若男女、この味に魅せられてファンになる人も多い。和菓子をあまじい食べない子供や左党にも受け入れられている味だそう。

中満は、昭和6年4月に、猪名野神社(宮ノ前)の門前に尼崎の名家(今は廃業)から暖簾分けの形で創業、以来

今日までその味を守り続けている。現在の建物は平成に入ってから立て直したもので、瓦屋根と石畳の街並みがかつての門前町の風情を醸し出している。

酒の程よい香りが防腐剤の役割を果たすのか、日持ちもよく、地方発送はもとより、伊丹青年会議所(JC)の海外研修時のお土産として、遠く台湾でも配られたこともあるという。

そんな酒まんじゅうの今後について、店主の大町さんは「新しい商品に挑戦しながらも、伝統の良いところは守っていきたい」と強く語った。

元おかみの気まぐれコラム 泥鰯鍋

昭和39年9月から40年間「浜路」を開店していた。

その頃はクーラーが買えなくて扇風機でお客様がまをしてもらっていた。

今迄一番手古摺ったのは泥鰯だった。泥鰯、どじょう、どじょう、どぜう、いろんな言い方がある。

泥鰯を背開きにするとききゅつと泣くのである、何とも言えない気持ちだった。でも商売しようばいと思えば泥鰯

を泣かせたのである。おまけに夏には子を持つている、これがまた美味である。ささぎ牛蒡を卵でとじて粉山椒をふり毎度ありがたうございませう。

で幼い時は田舎では鰻、泥鰯がたくさんいたが川の改修でいなくなった。

得意なのはこれ！泥鰯は油で炒って搗り鉢で搗り野菜の味噌汁に搗ったどじょう入れどじょう汁です。コクがあつてうまい！

思い出にあるのは父が作ってくれたどじょうと大豆の煮物、もちろん私は大豆ばかりを食べていた。(平きみこ)

毎年、これを抜きにしては夏を・夏休みを終われない！伊丹の夏の風物詩、というか、「夏の終わり」を告げるものという？「いたみ花火大会」という方も多いはず。今年も、8月24日(土)に開催される。

昭和56年から開始し、今年で33回目を迎える花火大会も、初回は、「神津夏祭花火大会」の名前で開催され、打ち上げ数は、50発。現在の3500になったのは、平成15年からだそう。確かに、いつの頃からか見応えが出てきたような気がする。

今年のテーマは、「いたみ華ごよみ」、四季の花々・山々を

花火で表現。オープニング後の、仕掛け花火にご注目！来年放送予定のNHK大河ドラマが、黒田官兵衛を主人公とした「軍師官兵衛」に決定されたことから、ゆかりのある伊丹有岡城主「荒木村重」に扮した伊丹市マスコット「たみまる」が花火になって登場！

花火は、様々な楽しみ方が出来る。打ち上げ場所近くへ行き、迫力ある花火を愉しむのもよし、少し離れて、伊丹の酒を片手にゆったりと愉しむのもよし、花火そっこのので、食を楽しむもよし。様々な場で、大いに楽しんで頂きたい。この夏、花火を見逃した方にも最後のチャンス！になるかも。



登場! 村重たみまる 8月24日に 「いたみ花火大会」

今年の花々・山々を

花火で表現。

オープニング後の、仕掛け花火にご注目！

来年放送予定のNHK大河ドラマが、黒田官兵衛を主人公とした「軍師官兵衛」に決定されたことから、ゆかりのある伊丹有岡城主「荒木村重」に扮した伊丹市マスコット「たみまる」が花火になって登場！

花火は、様々な楽しみ方が出来る。打ち上げ場所近くへ行き、迫力ある花火を愉しむのもよし、少し離れて、伊丹の酒を片手にゆったりと愉しむのもよし、花火そっこのので、食を楽しむもよし。様々な場で、大いに楽しんで頂きたい。この夏、花火を見逃した方にも最後のチャンス！になるかも。

伊丹俳壇 坪内稔典選

◎最優秀賞

就活を放棄してみるかたつむり 諸星千綾 (京都市)

今回は96句の応募があった。その中から大賞に選んだ句は「就活」という現代の言葉を季語「かたつむり(蝸牛)」と取り合わせたところが新鮮で面白い。就活なんかやめて蝸牛になってしまいたい、それでもいいよ、という気分を詠んでいるのだが、その気分に賛成!

◎優秀賞

リーダーをいづくにむけんかたつむり

かたつむりいつか二人で住むつもり

かたつむりここは郷町ことば蔵

かたつむり君もやっぱり充電中

かたつむり宇宙旅行は今でしょう

この度「伊丹公論」を復刊させるにあたり、名物コーナーの一つである「伊丹俳壇」も復活させた。夏に発刊ということで兼題は「かたつむり」となった。

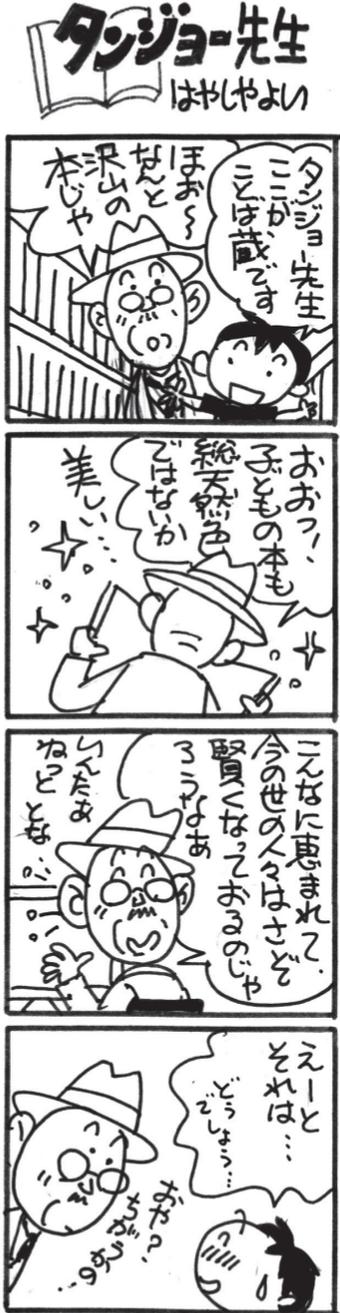
全部で96の応募作品があり、遠方からは福島県いわき市(電子申請)からもあった。また、年齢も8歳から93歳と幅広く、俳句への関心の高さがうかがえた。

今後も「ことば文化都市 伊丹」として「伊丹俳壇」は継続していく。次回の兼題は「柿」。

問い合わせは伊丹市立図書館「ことば蔵」交流・貸室担当 TEL072-1784-8170

坪内稔典プロフィール

愛媛県出身。立命館大学卒。
2001年、第9句集「月光の音」で第7回中新田俳句大賞スウェーデン賞を受賞。
2010年、「モーロク俳句ますます盛ん俳句百年の遊び」で第13回桑原武夫学芸賞受賞。
佛教学教授、京都教育大学名誉教授。
柿衛文庫也雲軒塾頭。第2回ひがし商店街五七五大賞選者でもある。



林やよい…伊丹市在住。大学の娘の母。毎日新聞版にイラストエッセイ「くるまいますまいる」を連載中。

蔵出し ニュース

人を通して本を知る、本を通して人を知る「ビブリオバトル」

今回は、ことば蔵人気イベント「知的書評合戦ビブリオバトル」について紹介する。「ビブリオ」とは書物などを意味するラテン語由来の言葉



業である。おすすめの本(ビブリオ)を紹介(バトル)し合うのがビブリオバトルだ。ルールは簡単。発表者(バトルラー)がテーマに合ったおすすめの本を持ち寄り、5分間紹介する。その後、観客と2〜3分間ディスカッションする。最後に、「どの本が一番読みたくなったか」を基準に参加者全員で投票し、チャンプ本(優勝者)を決定するというものだ。

ことば蔵では開館してから定期的にビブリオバトルを開催している。過去のテーマには「酒」や「ことば」といった伊丹に関わりの深いものや、開館時の「新」、中学生大会の「青春」など様々なテーマで行われた。

そして、9月には「鳴く虫と郷町」と連携したビブリオバトルを開催する。テーマは「なく」。9月15日(日)13時より。バトル希望者はことば蔵一階交流・貸室担当まで。(072-1784-8170)

(小寺和輝、熊田啓太)

伊丹本(伊丹に関わる本)紹介

薬屋町、魚屋町、トゲなし、行基石、行基鮒、七夕迎え、綱引き、麦わら音頭…。かつて伊丹は活気溢れる町名が並び、伝説が信じられ、1年を通して様々な行事が行



われていたようである。それは伊丹の歴史や風土、人々の生活や信仰の中で生まれ伝えられてきた。

伊丹公論の復刊に合わせて、昔の伊丹に思いを馳せてみては。

「伊丹の年中行事」「伊丹の伝説 付・有岡古語」「伊丹の民謡とわらべ唄」(いずれも伊丹市教育委員会/発行)(竿本美紀)

酔後録

ときわ喜多



乾杯編
祝杯
いや〜めでたい、めでたい! 何がめでたいかって? そりゃ73年振りに小林丹城氏の想いを乗せた「伊丹公論」が復刊だしとして、この酔後録も復活! ぜひ、100号目指して頑張ってもらいたいところだ。もちろん、日本酒で祝杯だ。

▼酔後録
筆者も伊丹生まれ、伊丹育ちで無類の酒好きだ。酒にはこだわって書いていきたい。昨日も 伊丹で飲んだ。肴

は鯖。旨い! そう言えば、この店は2月の「ATEE1グランプリ」に焼きサバ寿司で決勝大会にも出てたな。伊丹はアテも旨い。

▼まちを編む
乾杯編ということで夢を語ろう。

三浦しをん著の「舟を編む」を読んだ。映画も観た。拙者には実はまちづくり関係の仕事をしている。まちづくりに置き換えると「まちを編む」「まちの編み人」…「編む」っていいことばだ。

「舟を編む」は辞書を編纂する人達の話。今、伊丹のまちは多くの方が編んでいる。

▼夢に乾杯!
さて、拙者の夢だが、この伊丹がいったいどうなればいいのか。個人的な思いを語ろう。この伊丹公論復刊もそうだし、三余学寮復活もそう。かつて、伊丹に根付いた歴史に注目した。まちづくりはストーリーがあるとな面白。

この伊丹のストーリー性から夢を紐解く。江戸期の伊丹は文人墨客の往来が頻繁だった。伊丹の酒を目当てに来た人も多いと聞く。

そんな江戸期のまちが再現できたらな、と思う。伊丹の酒、美味しい料理を味わいに多くの人が訪れてまちを食べ歩く…毎日がバルだ…そんなまちになれば…と思う。

そんな夢を見ながら今宵もまちへ、くり出す。今日も浴びるほど。